

王育徳の閩音系音韻体系再考

— 『閩音系研究』 第3章 —

中 澤 信 幸

(日本学分野担当)

1 はじめに

王育徳 (1924~1985) は、第二次世界大戦後に日本に亡命し、台湾独立運動に尽力する傍ら、台湾語研究に生涯を費やした人物である。

王の台湾語研究の業績は多々あるが、その代表と言えるのが博士学位請求論文『閩音系研究』(1968)である。筆者は、先にこの『閩音系研究』の第1章「分布概況」、第2章「親疎関係」の内容について検証した。そして王は台湾語を含む閩音系について、台湾および中国大陸の閩音系に関する先行研究・資料を検討し、信頼に足る資料のある6方言を中心に研究を進めたこと等を述べた¹。本稿はその続篇として、第3章「音韻体系」の検証を行うものである。

1 『閩音系研究』 第3章

1.1 『閩音系研究』の構成

『閩音系研究』は3篇10章で構成されている。ここで改めて、全体の構成を示しておく。

I. 序論

- | | |
|---------|---------|
| 1. 分布概況 | 2. 親疎関係 |
|---------|---------|

II. 本論

- | | |
|------------|----------|
| 3. 音韻体系 | 4. 「十五音」 |
| 5. 文言音と白話音 | 6. 声母 |
| 7. 韻母 | 8. 声調 |

III. 結論

- | | |
|-------------------|------------|
| 9. stratification | 10. 閩音系の成立 |
|-------------------|------------|

1.2 共時論的研究

本稿で取り上げる第3章「音韻体系」は、『閩音系研究』の「II. 本論」冒頭に位置するもの

である。この第3章と続く第4章「十五音」は、閩音系の共時論的研究と位置付けられる。そして第5章~第8章の通時論的研究へと続いていく。

王が閩音系の共時的な音韻体系をどのように捉えていたのか、それが現代の台湾語研究の水準と比べてどの程度のものであったのか、そして台湾語研究史の中でどう位置付けられるのか、興味を持たれるところである。

2 第3章「音韻体系」の内容

2.1 概要

「3. 音韻体系」の構成は以下の通りである。

3.1. 台南・廈門方言

- | | |
|-----------|-----------|
| 3.1.1. 声母 | 3.1.2. 韻母 |
| 3.1.3. 声調 | |

3.2. 泉州方言

- | | |
|-----------|-----------|
| 3.2.1. 声母 | 3.2.2. 韻母 |
| 3.2.3. 声調 | |

3.3. 潮州方言

- | | |
|-----------|-----------|
| 3.3.1. 声母 | 3.3.2. 韻母 |
| 3.3.3. 声調 | |

3.4. 福州方言

- | | |
|-----------|-----------|
| 3.4.1. 声母 | 3.4.2. 韻母 |
| 3.4.3. 声調 | |

以下、それぞれの内容について見ていくことにしよう。

2.2 各節の内容

2.2.1 台南・廈門方言

ここでは台南・廈門方言について、「声母」「韻母」「声調」の3つに分けて説明する。

2.2.1.1 声母

¹ 中澤 (2020)。

方法	部位	唇音	舌尖音	舌面音	舌根音	喉音
ハ レ ッ 音	無 氣	p [p] 褒		t [t] 多		k [k] 哥, [ʔ] 窩
	有 氣	p' [p'] 波		t' [t'] 拖		k' [k'] 科
	有 聲	b [b] 帽				g [g] 我鵝
ハ サ ッ 音	無 氣		c [ts] 糟		c [tɕ] 之	
	有 氣		c' [ts'] 操		c' [tɕ'] 痴	
	有 聲		(z [dz] 知)		(z [dz] 兒)	ŋ [ŋ] 俄 ↓
鼻 音 側 面 音 マ ツ 音	有 聲	m [m] 麼		n [n] 挪		
	無 聲			l [l] 羅		
			s [s] 梭		s [ɕ] 詩	h [h] 何

図1 台南・廈門方言 声母

まず声母の音素と音価について、図1のような表にまとめて示す。(p.68)

その後、この表について以下のように説明する。

音素（音韻記号をあらわす//は、必要の場合だけつけることにし、普通は煩を避けて省略する）はzをいれて18種で、閩音系の中でもっとも多い。

zはある人となない人とがある（カッコにいられたのはこの意味）。漳州系の人はこちらをもち、泉州系の人はこちらをもたない。ない人はlで発音する。廈門市はもたない人の方が多いという。廈門は「不漳不泉」が特徴といわれるけれども、実際には泉州の系統が断然強い。その例の1つがここに出ている。台南もこの音素に関する限りは泉州系である。(p.69)

このように、台南・廈門方言の声母音素が閩音系の中でもっとも多いこと、また「z」と「l」との関係から、台南・廈門方言は泉州系に近いことを述べる。

これに関連して、台南・廈門方言の「l」について以下のように述べる。

lは元来側面音のはずで、現に福州がそうで

ある。しかし台南・廈門のlは舌の構えが弱くて持続せず、歯茎との間に閉鎖をつくってしまいやすい。結果として[l]と[d]の中間音のようなものになる。(中略)

閩南人が英語のlateとdateをうまく発音し分けられないのも、また台湾人が日本語のラ行とダ行の区別で苦労したのも、結局はこのlの音質のツミである。(pp.69-70)

また日本語のラ行とダ行の区別について、注で以下のように述べる。

(2) 台湾人はダ行をラ行で発音する傾向がある。私は中学校の入試の口頭試問で、「ジドウシャガ ドロドロノ ドロミチヲ ハシル」といった短文を読まされて、油汗をかいた経験をもっている。(注 p.12)

このように台南・廈門方言の「l」について、自分のエピソードも交えて説明している。この「l」の解釈については、本文でさらに以下のように述べる。

体系的に見れば、舌尖ハレツ音の有声音のところはアキマになっているから、ここにはみ出た恰好になっている側面音のlを押し込

むと、全体としてすっきりすることはたしかである。現に董同龢氏や最近の大陸の研究者たちは、このような解釈をとって、/d/と表記している。

しかし私は、側面音の特徴がまったく失われているわけではないこと、中古音や他の音系と比較研究するのに便利であることから、lをそのまま使うことにしたい。(p.70)

このように、大陸の研究者たちが「d」として音素について、「側面音の特徴がまったく失われているわけではない」として「l」をそのまま使うとする。ここでは、音韻体系上の解釈よりも、実態としての発音を重視していると言える。

その後、無気音は有気音に比べると軟らかいが、北京音ほどには軟らかくないこと、「h」は[h]と[x]の「free variants」(変異音)となっていること、「ʔ」は[ʔ]と表記したものの、実際は弱い「glottalization」(声門での調音)に過ぎないこと、舌面音と舌尖音とは「補い合う分布」(相補分布)を示すので、音素としては「c, c', s (, z)」の1組だけ立てればよいことを述べる。

最後に、「b」と「m」, 「l」と「n」, 「g」と「ŋ」について、以下のように述べる。

[b][l][g]と[m][n][ŋ]の2組の有声音も、実際は補い合う分布を示している。[m]組は鼻音化韻母(-N)の前にあらわれ、[b]組は非鼻音化韻母の前にあらわれる。これは[m]組は鼻音化韻母の影響で、[b]組から替ったと解釈できる。

[b]組は破裂があまり強くない。粗忽に聞くと[m]組と混同しかねないほどである。だから鼻音化韻母の影響を簡単に受けるのである。

それゆえ音素としては、b組の1組だけを立てればすむ理くつである。清朝時代にできた「十五音」がすでにこのような解釈をとっている。しかし私は次のような理由で、b組とm組を併わせ立てることにした。(pp.72-73)

「b」と「m」, 「l」と「n」, 「g」と「ŋ」は、それぞれ「補い合う分布」(相補分布)となっているため、本来は「b組」の1組だけを立てればよいとする。しかし、王はあえて「b組」と「m組」を併わせ立てるとし、その理由について以下のように述べる。

第1に、鼻音化韻母を減らすことができる。

(中略)

第2に、表記の一般的慣習にそうすることができる。(中略)

第3に、通時論的研究のためには、2組立てた方が便利である。(以下略)(pp.73-74)

2.2.1.2 韻母

まず韻母の体系について、図2のようにまとめて示す。(pp.75-76)その後、以下のような説明を加えていく。

単母音は6種で、右図(=図3、筆者注)のごとき体系をなしている。6種というのは閩音系ではもっとも少ない。

上の表は音韻表記したものであるが、それぞれの音声は、音韻表記を音声表記に見立てたものにほぼ等しい。ただ次の諸点は特に説明をしておく必要がある。(pp.76-77)

このように述べた上で、以下7つの点について説明を加えていく。最初に「o」と「ə」の関係について、以下のように述べる。

(1) oとəの関係。台南は私の観察では[q]と[ɣ]である。厦門は羅常培氏によれば、どちらも円唇奥舌母音で、広い方は[o]であり、狭い方は[q]（前寄り、唇のひろげられた変種）であるという。(中略)

厦門の[q]は半狭の方が崩れかけてきたものと見るができる。その方向はまさしく台南の[ɣ]である。換言すれば、台南の[ɣ]は厦門の[q]を‘増幅’したものである。半狭の方が中舌母音によって置きかえられれば、半広の方はただ1つの円唇奥舌母音になって、広さにかかなりの幅が許容されることになる。

陰韻 (16)	
a 阿 ai 哀 au 矮 e 挨 o 烏 ə 窩	
i 衣 iu 憂 ia 野 iau 大 io 腰	
u 于 ui 為 ua 蛙 uai 歪 ue 花	
陰韻入声	
aʔ 拍 aiʔ □ auʔ 鼓 eʔ 客 oʔ 学	
iʔ 滴 iuʔ □ iaʔ 壁 iauʔ □ ioʔ 約	
uʔ 突 uaiʔ 泣 ueʔ 劃	
陽韻 (16)	
am 暗 om □ an 安 an 江 on 翁 on 狹	
im 音 iam 淹 in 因 ian 焉 ian 香 ion 央 ion 英	
un 温 uan 寬 uan □	
陽韻入声	
ap 盒 op □ at 通 ak 沃 ok 惡	
ip 邑 iap 葉 it ~ iat 謁 iak □ iok 約 iak 益	
ut 雙 uat 越 uak □	

鼻音化韻母 (10)	
an 鉛 an 宰 aun □ en 嬰 on 火	
in 月 ian 替 ion 鶯	
uan 鞍 uain 園	
鼻音化韻母入声	
anʔ □ ainʔ □ enʔ 來 onʔ 曉	
inʔ 物 ianʔ 赫 uainʔ □	
声化韻 (11)	
m 姆	
声化韻入声	
mʔ □	
(*印は本論文に出現しない韻母。大部 分が擬声語・擬態語に因るものである。)	

図2 台南・厦門方言 韻母

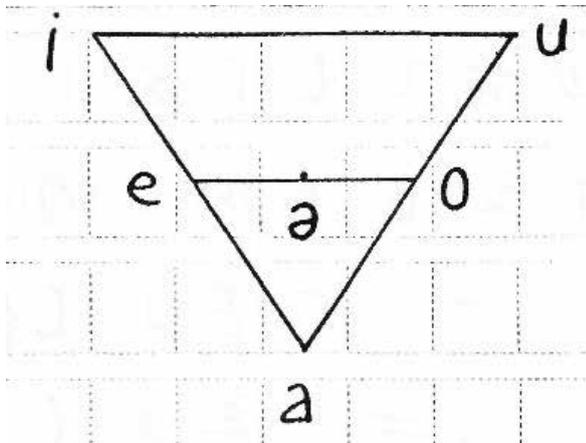


図3 台南・厦門方言 単母音

台南の [ɔ] が厦門の [ə] に比べて狭いのはこのためである。

このような音声的な相違があるが、私は厦門も台南と同じように o : ə と解釈してよいと思うのである。(pp.78-79)

台南方言については王の内省によって記述するが、厦門方言については全面的に羅常培に拠っている。そのため、実際の母音音価も発音記号等の情報に頼らざるを得ない。このため、「o」と「ə」

に対応する厦門音の音価が、王の考えている通りのものであるかは怪しいところである。当時の王は、実際に中国大陆へ行って検証できる状況ではなかったはずなので、これはやむを得ないところでもある。その意味で、王が音韻論的には「厦門も台南と同じように o : ə と解釈してよいのである」としたのは、妥当な判断だったとも言える。

次に、「ən」と「ian」の関係について、以下のように述べる。

(2) ən と ian の関係。ən は従来 m とともに声化韻 (syllabic consonant) [ŋ] とみなされていたものを、私が積極的に、ə を主母音に立てて陽韻の1つとする解釈をとったのである。参考までに、羅常培氏の観察と見解を紹介すると、(中略)

また ian は教会ローマ字で eng と綴り、董同龢氏や最近の大陸の研究者たちが in と理解している音韻を、私が ən と関連づけて、その齊齒呼とする解釈をとったのである。

ついでに、羅氏はどのような扱いかたをしたかという点、[iǎŋ]と観察し、[ǎ]も同じく「渡り」(流音)に過ぎないという見解をとっている(『厦門音系』P.12)。「[ǎ]」に対して「[ǎ]」と表記したのは、弱い「渡り」と強い「渡り」を区別する意図であろう。しかし羅氏が試みたローマ字表記(間接的な音韻表記とみなしうる)では、一方はng、一方はiengで一貫していない。iengはiが介母でeが主母音、の誤解を人に与えかねない。(pp.79-80)

ここでも、羅常培や董同龢といった先行研究をもとに、その見解の可否について述べている。王は羅常培の『厦門音系』(科学出版社、1956重版、初版は1931)を「資料的に価値があって、利用するに便利」(p. 7)と評していたが、単に鵜呑みにするのではなく、批判的に利用していたことがわかる。

これに続いて、以下の点について説明を加えている。

(3) 眞の声化韻はm [m] 1つである。結合する声母は'とhの2種類に限られている。(中略)

(4) oʔの音価は[ɾʔ]で、[ɾʔ]は本来半狭母音の-ʔ入声である。(中略)

(5) io, ioʔの音価は[iɾ][iɾʔ]である。(中略)

(6) iuとuiは固く結合した複母音で、長さも強さもほぼ同じである。(中略)

(7) 台南と厦門の間で違う音韻がある。その1つは、台南のioNに対して、厦門はiuN。これは台南が漳州の系統を引いたのに対し、厦門が泉州の系統を引いたことから来ている。(中略)

もう1つは、表では省略したが、厦門はueʔの訛音としてuiʔをもっているということである。(pp.81-83)

そして最後に、台南・厦門方言の鼻音韻尾、入声韻尾について説明する。

台南・厦門の韻母体系の最大の特徴は、-m,

-p; -n, -t; -ŋ, -kの3組の鼻音韻尾が完全にそろっているほかに、鼻音化韻母(-N)と-ʔ入声をもっていることである。(中略)

さて、3組の鼻音韻尾は客家語と粵音系にも健在であるが、-N, -ʔはこの2音系にはないのである。一方、-N, -ʔは官話音系と呉音系に見られるのであるが、この2音系では鼻音韻尾が3組そろっているということはないのである。もって台南・厦門(閩南語)の韻母体系の複雑さがわかろうというものである。では、なぜこのような複雑な韻母体系をもつようになったのか。それは-m, -p; -n, -t; -ŋ, -kの層と-N, -ʔの層が重なり合ったとしか考えられない。(pp.84-87)

このように、鼻音韻尾、入声韻尾の状況から、台南・厦門方言の複層性について言及するのである。この鼻音韻尾「-N」については、さらに以下のように述べる。

-Nはもちろん-m, -n, -ŋの変化した形、-ʔはもちろん-p, -t, -kの変化した形である。しかし声母にも韻母にも鼻音要素がないのに、-Nで出る字があるのは注意を要する。(中略)これは、閩人には-Nの愛顧癖がある、とても説明するほかない現象である。もしこの愛顧癖が何に由来するのかと問われれば、それはもちろん-m, -n, -ŋから変化した-Nの広い分布の影響を受けたのである。(pp.87-88)

「-N」はもともと「-m」「-n」「-ŋ」の変化した形であるが、閩音系ではこれらの鼻音要素とは関係なしに「-N」という音がよく出てくる。これを王は閩人の「愛顧癖」としている。一見言語学的ではない説明のようにも見受けられるが、これは王が母語話者であるからこそできる説明なのであろう。

陰平	7 ₅₅	高平調	
上	∨ ₅₁	全降調	
陰去	┘ ₁₁	低平調	
陰入	┘ ₁₂	低平・短調	
陽平	∧ ₂₄	全昇調	
陽去	┘ ₃₃	中平調	
陽入	┘ ₁₄	高平・短調	

図4 台南・廈門方言 声調

陰調	ㄣ	□	□	□	□
陽調	ㄣ	□	□	□	□

図5 声調表記方法

‘東’₁ tɔŋ → ‘党’₂ tɔŋ → ‘擋’₃ tɔŋ → ‘督’₄ tok, というよう唱え, もう一度もどって ‘同’₁ tɔŋ → ‘党’₂ tɔŋ → ‘洞’₃ tɔŋ → ‘毒’₄ tok₂ と唱えるという方法を採るのである。

図6 声調の練習をするための真四角のワク

2.2.1.3 声調

まず「次の7種がある」として、図4のように示す。(pp.88-89)

そしてこの7種の声調について、

7声調は閩音系の大勢で、潮州だけが8声調である。(p.89)

と述べる。

その後、声調の表記方法について、図5のように示した上で、以下のように説明する。

(図5, 筆者注)と表記する方法を採ったのは、中国科学院語言研究所『方言調査字表』(1951,19642)によったのである。この表

記法は伝統にそくしたもので、なかなか合理的である。

この音系の人たちは声調の練習をするのに、真四角のワクを想定して、左下角→左上角→右上角→右下角の順にゆびでたどりながら(以下図6, 筆者注)(pp.89-90)

漢字の声調を表すのに、それぞれ「平声→左下」「上声→左上」「去声→右上」「入声→右下」に声点を付けるというのが、古代からの伝統的な方法である。上記の声調の練習も、その伝統に則った方法と言える。

声調の呼称については、以下のように述べる。

上平 (sion ¹ pian)	下平 (ha ² pian)
上上 (sion ¹ sion ¹)	下上 (ha ² sion ¹)
上去 (sion ¹ ki')	下去 (ha ² ki')
上入 (sion ¹ lip ₂)	下入 (ha ² lip ₂)

図7 声調の呼称

呼称は、(図7, 筆者注)で、そして「下上は上上と同じ」とことわるのである (pp. 137-139を参照)。

「陰平」……「陽平」……とはいわない。また北京のように、「1声」「2声」……と数字で表示する慣習もない。

そこで私は数字で表示する必要がある場合は、周弁明氏が試みた、

	平	上	去	入
陰調	1	2	3	4
陽調	5		7	8

というような表記法がよいと思う。まず1-4で陰調を示し、それから5-8で陽調を示すのは、伝統にそったやりかたといえる。また6を欠号にしたのは、ズバリ陽上のないことをあらわすよいアイデアで、潮州の場合はこれを活かせばよい。(pp.90-91)

中国語学では一般的に「陰平」「陽平」等の呼称が用いられ、王も最初に台南・廈門方言の声調を説明する時には、この呼称を用いていた。(図4)ところが、ここでは「上平」「下平」等の呼称を持ち出し、「陰平」……「陽平」……とはいわない」とする。これは台湾語の慣習に拠ったものであろう。例えば、王がしばしば引用する日本統治期の辞書、『日台大辞典』(1907)、『台日大辞典』(1931~32)等でも、やはり「上平」「下平」等の呼称を用いている。王もこの慣習に拠っているものと考えられる。

数字による声調の呼称は、現在の台湾語研究や学習でも受け継がれているものである。王はこれ

を「周弁明氏が試みた」とするが、これは前述の『廈門音系』に拠っているものと考えられる²。

その後、轻声について以下のように述べる。

7声調のほか轻声がある。轻声は短くて弱い。ほぼ陰去と陰入の中間音に聞える。軽声音節は廈門の方が台南より発達している。

人々はそれを訛りの1種と聞きとる。(p.91)

ここで「軽声音節は廈門の方が台南より発達している」と述べているが、その根拠は特に示されていない。恐らくは王の経験による印象なのであろうが、廈門方言については『廈門音系』のような文献に頼っているはずであり、自分の方言である台南方言との対照は容易ではないはずである。「人々は」というのも、どのような人々を指すのか疑問である。

最後に、声調替変(転調)について、4ページにわたって説明する。まず以下のように述べる。

複音節語、または「構造」(単語結合体)の場合、末尾音節(轻声が来た場合は、その前の音節)を除いて、声調替変が起る。これは、それで1つの文法的単位を構成しているあらわれとして、全体を1つのアクセント素が覆うために起る現象であるが、アクセント素の核は閩音系の場合は、機械的に末尾音節の上に置かれるので、その前の音節だけが起して、末尾音節は起さないのである。(p.91)

台湾語の転調は難解なことで知られるが、この

² 『廈門音系』p.28では、「周辨明先生對於這種聲調變化曾經定了一個表，茲遂錄於下：—」と述べた後、数字と「陰平」「陽平」等の呼称を対照させた表を載せる。(羅常培・周辨明(1975)による。)

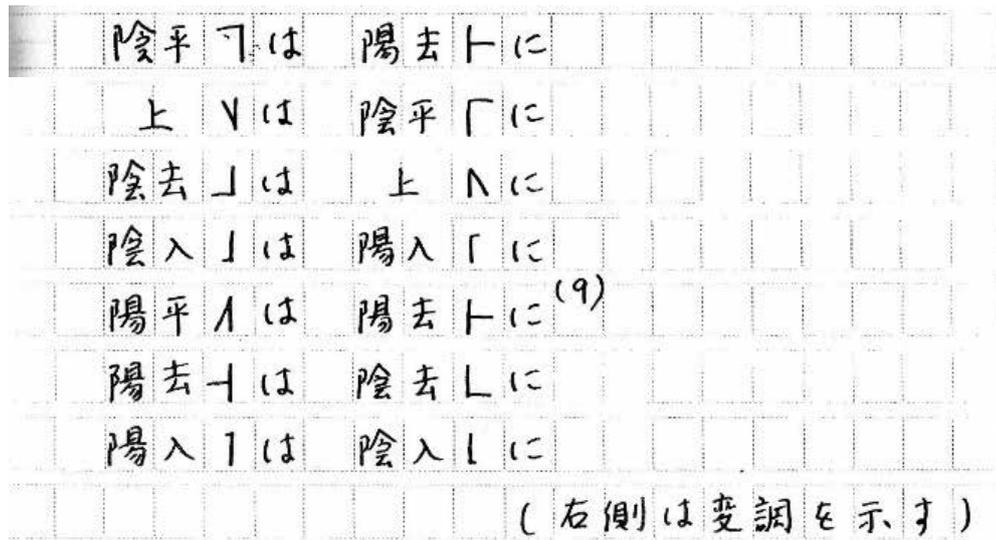


図8 声調替変 一般的な法則

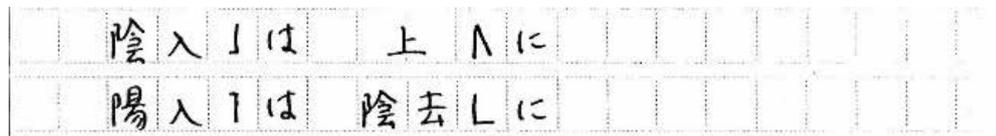


図9 声調替変 -?入声の法則

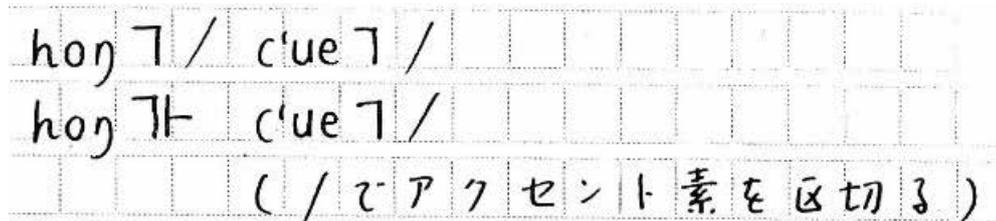


図10 「風吹」の二通りの読み方

説明は簡明にしてわかりやすい。ただし、ここでの「音節」は中国語の音節を指すことに、注意する必要がある。

次に、声調替変の法則として、以下のように述べる。

声調替変には一定の法則がある。まず「一般的な法則」は、(図8, 筆者注)

次に「-?入声の法則」として、(図9, 筆者注) これは-?入声は-p, -t, -kと違って、-?が消失するという事情があるからである。

(pp.91-92)

この説明は、現在の台湾語学習書等で述べられる、

1声 > 7声
2声 > 1声

3声 > 2声
4声 (-p, -t, -k) > 8声 (-p, -t, -k)
5声 > 7声
7声 > 3声
8声 (-p, -t, -k) > 4声 (-p, -t, -k)
4声 (-h) > 2声 (-h)
8声 (-h) > 3声 (-h)

という説明³と合致する。

その後、具体例として「風吹」を挙げる。(図10) これには二通りの読み方があり、二つのアクセント素、したがってアクセント核も二つで読む (hong / chhe, 1声 / 1声, すなわち「風」は声調替変を起こさない) 場合には「風, 吹く」の

³ 王 (1982) p.14, 樋口靖 (2000) p.33-34, 近藤綾・温浩邦 (2007) p.11, 村上嘉英 (2019) p.21-22等。

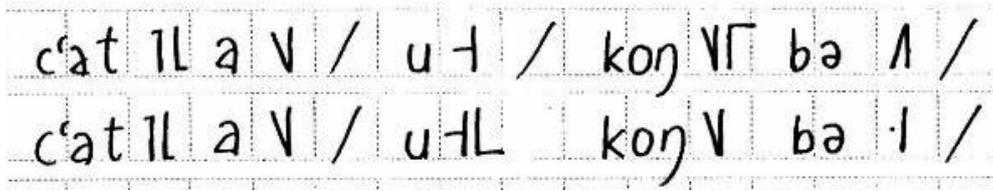


図11 「賊有講毛」の二通りの読み方

意味となり、一つのアクセント素、したがってアクセント核も一つで読む (hong chhe, 7声+1声, すなわち「風」は声調替変を起こす) 場合には「凧」の意味となるという。

そしてもっと長い例として、「賊有講毛」を挙げる。(図11) これにも二通りの読み方があり、三つのアクセント素で読まれ、「有」「毛」の上にアクセント核がある (chhat á / ū / kóng bô, 7声+2声/7声/1声+5声, すなわち「賊」「講」が声調替変を起こす) 場合には「ドロボーは、有るのに、無いといった」の意味となり、二つのアクセント素で読まれ、「有」「講」の上にアクセント核がある (chhat á / ū kóng--bô, 7声+2声/3声+2声+轻声, すなわち「賊」「有」が声調替変を起こす) 場合には「ドロボーは、いったか(白状したか)」の意味となるという。

同じ発音(文字)でも転調があるかどうかで意味が変わるという問題、またどこで転調しどこでは転調しないかという問題は、現代にも通じる台湾語の難解な問題である。王はこれを比較的わかりやすく説明していると言える。ちなみに、この「アクセント素」「アクセント核」は日本語学で使われる用語であり、師である服部四郎の影響を受けているものと考えられる⁴。

2.2.2 泉州方言

まず声母について、17種の音素を示す。そして、Z ([dz][dz]) をもたないのが特徴である。(p.95)

と述べる。

次に韻母について、「陰韻(20)」「陰韻入声」「陽韻(16)」「陽韻入声」「鼻音化韻母(10)」「鼻母化

韻母入声⁵」「声化韻(1)」をそれぞれ列挙する。

(カッコ内の数字は音素の種類を指す。)そして7種の単母音の体系を図示する。その上で、

中舌母音が2種類あること、陰韻の数が多いことが特徴である。(p.97)

と述べる。

最後に、声調については、

調類、調値いずれも台南・廈門と同じである。(p.97)

と述べる。

2.2.3 潮州方言

まず声母について、18種の音素を示す。そして、Zがあるのは漳州の系統を引いたからである。(p.98)

と述べる。

次に韻母について、「陰韻(18)」「陰韻入声」「陽韻(15)」「陽韻入声」「鼻音化韻母(14)」「鼻音化韻母入声」「声化韻(1)」をそれぞれ列挙する。

(カッコ内の数字は音素の種類を指す。)そして6種の単母音の体系を図示する。その上で、韻母体系のおもな特徴として、以下のように述べる。

(1) 張唇中舌狭母音の[i]がある。閩南では泉州だけに残っている。

in は [ɲŋ][ŋ] と報告されているのを、このように解釈したのである。[ŋ] は h と ' と結合し、[ɲŋ] は h と ' 以外の声母と結合して、両者は補い合う分布を示すので、1つの音韻と解釈することができる。その場合、中舌母音を主母音とする陽韻は1種類しかなく、[ɲŋ] は [ŋ] のために [i] が後寄りに引張られたと見られるから、in と立ててさしつか

⁴ 服部(1951) p.193, 服部(1954)等。

⁵ 本文ママ。「鼻音化韻母入声」の誤りであろう。

えない。

(2) -m, -p; -ŋ, -k があって, -n, -t がない。-n, -t は -ŋ, -k に合流したのである。

(3) uam, uap がある。咸攝凡・乏韻がこの韻母をもつ。(中略)

(4) 鼻音化韻母が優勢である。台南・廈門は10種であるが、潮州は14種をかぞえる。

(pp.100-101)

王は第1章の「1.3. 潮州方言圏」において、潮州方言の資料として李永明『潮州方言』(中華書局出版, 1959), 香港綜合書店『国音潮州方言注音綜合新字典』(1958)を挙げていた。(p.14) ここでも、これらの先行研究に拠っているものと考えられる。

(1) では、先行研究で「ɾŋ」「ŋ」と報告されているのを、相補分布の関係と解釈して「iŋ」に統一している。先行研究を批判的に検証した結果であるが、実際にインフォーマントを対象に調査して得られた結論ではないのが、気になるところである。

声調については、やや詳しく記述する。まず「陰陽調とも平上去入がそろって、8種になっているのが特徴である」ことを述べ、その後調値およびその音韻論的解釈を示す。これらは李永明の研究によっているが、その中で、3,578字のうち「陽去」の字がもっとも少なくなっている(143字)ことに疑問を呈す。

陽去は中古音の去声(全, 次)濁音が条件になっているが、去声濁音の字がそんなに少ないはずはない。私が3,394字について調査したところでは、375字もあるのである。

一方、陽上は中古音の上声全濁音が条件になっているが、384字はいかにも多過ぎる。私が3,394字について調査したところでは、145字に過ぎない。

これは陽去であるべき字がかなり陽上に紛れ込んでいっているのである。逆のケース——陽上であるべき字で陽去に紛れ込んできている字は(中略)ごくわずかしかない。

これで陽去の劣勢の意味がわかった。このことは「強い陽上に弱い陽去」の潮州も、「陽上なく陽去のみ」の閩南も、上声全濁字と去声濁音の条件が不分明になってきている、ということについては、本質的にあまり違うところがない、ということである。(pp.102-103)

ここで「私が3,394字について調査したところでは」と述べられるが、この「3,394字」が具体的に何を指すかは不明確である。『閩音系研究』の巻末には、資料として「方言字彙」が341ページ(1ページあたり10字)にわたって掲げられているが、これを指しているものと考えられる。

いずれにしても、潮州方言については李永明等の先行研究に拠りながら、王の母語である台南方言、および中国語中古音との対照から、議論を進めていることがわかる。

最後に、「声調替変は台南・廈門より複雑である」として、その概略を示している。

2.2.4 福州方言

まず声母について、以下のように述べる。

声母は『戚林八音』(P.125を参照)が立てた15の音素でよい。(p.105)

この『戚林八音』であるが、『閩音系研究』の第4章「十五音」において詳しい説明がある。この書は明代の戚繼光『八音字義便覧』と清代の林碧山『珠玉同声』を合わせて、乾隆年間(18世紀前半)に編纂されたという。「八音」とは8声調の意味である。(pp.124-125)⁶ この書は福州方言を対象としたものだが、王が依拠した福州方言の声母は、18世紀前半と変わらないということになる。ちなみに、王は第1章の「1.2. 閩南と閩北」において、福州方言の資料として陶燠民『閩音研究』(科学出版社, 1956), 藍垂秀「福州音系」(『台大文史哲学報』5期所収, 1953), 高名凱「福州語之語叢声母同化」(『燕京学報』33期所収, 1947)を挙げていた。(p.11) ここでもそれらの

⁶ 詳しくは他日を期したい。

先行研究に拠っている。

さらに、福州方言の声母の特徴として、以下のよう述べる。

独立した声母として b, g, z をもたないのが特徴である。

しかし 1 種の sandhi 現象（高名凱氏が使った）として、これらの濁音が出るのが認められる。福州が習いにくいといわれるのは、この‘濁音音便’に第 1 の原因がある。

福州の 2 音節語、または 2 つの単音節語からなる「構造」は、第 1 音節で声調替変が見られることは、閩南、潮州と同じであるが（後詳）、同時に第 2 音節で声母替変が起るのが特徴である。濁音が出てくるのは、この声母替変においてであって、その状況と条件は以下のごとくである。（pp.105-106）

これ以降、福州方言声母の「sandhi 現象」（連声）について、6 ページにわたって実例を挙げてやや詳しく述べる。これらも上記の先行研究に拠っている。

次に韻母について、『戚林八音』や『珠玉同声』を引き合いに出して説明する。そして 34 の韻母について、上記先行研究をもとにした対照表を掲げ、その後 5 ページにわたって説明を加える。その上で「34 韻母をわかりやすく整理しなおしてみると、以下のごとくなる」として、「陰韻 (21)」「陰韻入声」「陽韻 (12)」「陽韻入声」「声化韻 (1)」をそれぞれ列挙する。（カッコ内の数字は音素の種類を指す。）そして 7 種の単母音の体系を図示する。その上で、その上で、韻母体系のおもな特徴として、以下のよう述べる。

(1) y と œ の 2 種類の中舌母音をもっている。

(2) -m : -p, -n : -t は完全に消失し、-ŋ : -k の 1 組だけになっている。

しかし入声は別に -ʔ がある。-ŋ の一部も -N になっていることが推測されるが、まだそのような報告に接したことはない。

(4)⁷ 体系全体がかなり簡単化しており、台南・厦門に比べて、実に 9 韻母も少なくなっている。（pp.120-121）

(2) で「…が推測されるが、まだそのような報告に接したことはない」と述べているように、ここでも先行研究に頼った記述となっている。

声調については、最初に以下のよう述べる。

陰調 4 —— 陰平, 上, 陰去, 陰入, 陽調 3 —— 陽平, 陽去, 陽入になっているのは、閩南と同じである。

声調替変は閩南、潮州と違ったタイプである。それは、第 2 音節の声調いかんによって、第 1 音節の声調の替変のしかたが違う、という複雑なものである。

それで理論的には、 $7 \times 7 = 49$ 種類の替変がありうることになるが、実際はそれほどにはならない。（p.121）

その後、具体的な声調替変のパターンを示す。実際に起こる声調替変のタイプは、12 種になるという。

3 王の研究手法について

王の研究手法としては、大きく二つが挙げられる。一つは先行研究の活用であり、もう一つは母語の内省である。

3.1 先行研究を活用

中国大陸の方言については、王自身の内省が効かず、また現地での調査も困難であったと考えられることから、全面的に先行研究に拠っている。そのうち、厦門、潮州、福州については、それぞれ具体的な文献名も挙げている。

泉州については、ここでは具体的な文献名は明示していないが、第 1 章の「1.2. 閩南と閩北」で以下のように述べていた⁸。

ここで幸いなことには、台湾総督府の編纂にかかわる『日台大辞典』（1907）と『台日

⁷ 本文ママ。(3)は欠。

⁸ 中澤 (2020) 参照。

大辞典』（1932）に、両方言（＝漳州と泉州、筆者注）に関する簡単な概説のほかに、音韻が豊富に記録されているので、それを参考にし、整理分析することで、音韻体系の概貌をつかむことは不可能ではない。（p. 9）

ここから、泉州方言については、王は日本統治期の台湾語辞書に拠っていたものと考えられる。

なお、潮州方言では、母音について先行研究をもとに独自の解釈を加えていた。（2.2.3で既述。）これは実際にインフォーマントを対象に調査したわけではなく、結論に至るまでの過程に疑問は残るが、当時の王の状況を考えればやむを得ないこととも言える。

3.2 母語話者としての内省を駆使

一方、王の母語である台南方言については、王自身による内省を駆使している。台南方言をはじめとした台湾語については、日本統治期の研究以外には、先行研究は望むべくもない状況であったものと考えられる。王が自身の内省に頼ったのもやむを得ない。

その台南方言に関しては、「台南・厦門方言」として王は一括して説明している。（2.2.1）そのうち厦門方言については羅常培の研究に拠っていた。漳州と泉州については、上述のように日本統治期の研究に拠っていたものと考えられるが、その具体的な出典までは明示していない。そのため、ここでは先行研究と自己の内省との区別が不明確になっているところがある。例えば以下に挙げる「z」と「l」に関する記述である。（2.2.1.1で既述。）

zはある人となない人とがある（カッコにいられたのはこの意味）。漳州系の人はこれを持ち、泉州系の人はこれをもたない。ない人はlで発音する。厦門市はもたない人の方が多いという。厦門は「不漳不泉」が特徴といわれるけれども、実際には泉州の系統が断然強い。その例の1つがここに出ている。台南もこの音素に関する限りは泉州系である。（p.69）

下線は筆者。）

厦門に関しては「多いという」という表現にしているが、これは羅常培に拠ったからということであろう。一方、漳州と泉州については断定表現としているが、その根拠は不明確である。日本統治期の研究に拠ったのかも知れないし、（王自身は明記しないが）台湾人の中の漳州系と泉州系に拠っているのかも知れない⁹。

いずれにしても、台南・厦門方言の項においては、王は先行研究を自家薬籠中の物として、自身の内省と組み合わせて分析をしている。（批判的に言えば、先行研究と内省とを混同しているようにも見える。）

その他、声母では、大陸の研究者たちが「d」としているのを「l」としたり、「b」と「m」, 「l」と「n」, 「g」と「ŋ」の両方を立てたりするなど、解釈よりも実態を重視しているところがある。（2.2.1.1）

一方、韻母では、「o」と「ə」の関係について以下のように述べていた。（2.2.1.2で既述。）

(1) oとəの関係。台南は私の観察では[q]と[ɣ]である。厦門は羅常培氏によれば、どちらも円唇奥舌母音で、広い方は[o]であり、狭い方は[q]（前寄りで、唇のひろげられた変種）であるという。（中略）

このような音声的な相違があるが、私は厦門も台南と同じようにo:əと解釈してよい

⁹ ちなみに、第7章「韻母」の注には、以下のような記述がある。

(2) 数年前、築地の中華料理屋で、横の宴席に坐っていた泉州系の台湾人旅行客が、このような発音をするのを聞いた。（中略）

このような観察にしたがえば、泉州の韻母体系にはeuはないことになる。

しかし私が informant の張清港氏（台北市大稻埕出身、82才）から観察したところでは、侯韻の文言音の字は-uがきわめてしっかりしており、むしろ強い韻尾の影響で、主母音が[a]に近づいていた。

張氏の発音は、現在では保守的なタイプに入ろう。（以下略）（注 pp.57-58）

ここで初めてインフォーマントの存在があきらかにされる。以上の記述から、王は日本在住の台湾人の発音を実際に観察していたものと考えられる。

この張清港という人物をはじめ、王がどのような人々をインフォーマントとしていたかについては、さらに調査する必要がある。

と思うのである。（pp.78-79。下線は筆者。）

前述のように、王は廈門方言については全面的に先行研究に拠っている。つまり実態がよくわからない状態では、やはり音韻論的な解釈に頼らざるを得ない。その意味で、王の研究手法は（首尾一貫しないところはあるが）現実的で妥当であるとも言える。

この他、鼻音韻尾「-N」が、声母にも韻母にも鼻音要素がないのに出てくることについて、王は「閩人には-Nの愛顧癖がある、とでも説明するほかない現象である」と説明していた。この「愛顧癖」というのは、母語話者ならでの独特な理論ではあるが、あまり学術的とは言えない。

声調では、軽声について以下のように述べていた。（2.2.1.3）

7声調のほかに軽声がある。軽声は短くて弱い。ほぼ陰去と陰入の中間音に聞える。軽声音節は廈門の方が台南より発達している。

人々はそれを訛りの1種と聞きとる。（p.91。

下線は筆者。）

この「廈門の方が台南より発達している」というのは、直接両方言の対照をしたのか疑問である。ここでも先行研究と内省とを混同しているのではないか。また「人々」というのも、具体的にどのような人々を指すのか不明であるが、おそらくは王の母語話者としての感覚なのであろう。

4 台湾語研究史上における位置付け

ここまで、王が閩音系の共時的な音韻体系をどう捉えていたのかを見てきた。それでは、この王の閩音系、とりわけ母語である台南方言の音韻体系についての認識は、台湾語研究史上どう位置付けられるのであろうか。ここでは、王も参照していた日本統治期の台湾語研究、そして現代の台湾語研究における、台湾語音韻体系に関する記述と対照することにした。

4.1 日本統治期の台湾語研究との対照

王がしばしば引用する『日台大辞典』(1907)、『台

日大辞典』(1931~32)では、ともに「台湾語の発音」という項目がある。ここでは、それらの記述と王の台南方言音韻体系との対照を行う。

まず声母であるが、王は18種としていた。（2.2.1.1）一方、『日台大辞典』『台日大辞典』では、台湾語の発音は仮名で示している。そのため声母の数は不明確ではあるが、仮名で示されたものを数えると13種、これに補助記号で表示される「出気音」（有気音、「p'」「t'」「k'」「c'」）および鼻音（「ŋ」）を加えれば、王と同じ18種となる。ちなみに「ㄉ」行がなく「ㄌ」行があるという点も、王が「d」ではなく「l」を立てていたことと一致する。

韻母であるが、王は陰韻16種（および入声「?」）、陽韻16種（および入声「p」「t」「k」）、鼻音化韻母10種（および入声「?」）、声化韻1種（および入声「?」）としていた。単母音は6種としていた。

（2.2.1.2）『日台大辞典』では、単母音は「アイウエオ」に「ㄨ」を加えた6種としており、これは王と同じである。『台日大辞典』ではこれに「ㄛ」「ㄚ」¹⁰が追加されるが、これらは泉州方言に適用されるものである。王は台南・廈門方言ではこれらは認定していないが、「泉州方言」の項で単母音を7種とすることで対応しているようである。（2.2.2）日本統治期の辞書、特に『台日大辞典』は、台湾の「台湾語」をすべて記述する態度なのに対して、王は台南・廈門方言と泉州方言とに分けて整理している、と言える。

この他、日本統治期の辞書が仮名表記で羅列的に台湾語の発音を説明しているのに対して、王はアルファベットを用いて表に示すなど体系的に説明している。これは羅常培等の中国大陸の研究に拠るところが大きいのであろう。

声調であるが、7種としているのは王と変わりはない。ただし、名称は「上平・上聲・上去・上入・下平・下去・下入」としており、これは日本

¹⁰ 「ㄛ 唇「イ」舌「ウ」の位置にて發する音を表はす。」
「ㄚ 唇「エ」舌「ㄨ」(狭き「オ」)の位置にて發する音を表はす。」（『台日大辞典』『台湾語の発音』p.3下段）

統治期辞書独特の呼称であり、王も指摘していることである。(2.2.1.3) ここでも王は羅常培等の研究から、「陰平」「陽平」等の呼称、あるいは数字による呼称を採用している。

転調（王の言う「声調替変」）については、日本統治期辞書と王とで大差はない。ただし王が「-?入声の法則」として説明していた事柄については、『日台大辞典』には記述は見られない。『台日大辞典』では「上入は普通下入の音調に轉ず、但し喉頭密閉音に終るものは短く促りたる上聲の音調に轉ずることあり」（「台湾語の発音」p. 8下）として、（こんにち言うところの）「4声>2声」にのみ言及している。

4.2 現代の台湾語研究との対照

次に、現代の台湾語研究における、台湾語音韻体系に関する記述との対照を試みる。こんにちではさまざまな台湾語の研究がなされているが、ここでは、その中でもまとまった概説書となっている許極燉（1998）を取り上げることにする。

まず声母であるが、王は18種としていた。(2.2.1.1) それに対して、許は22種としているが、その内実は、王が「補い合う分布」（相補分布）としていた舌面音と舌尖音を、それぞれカウントしているだけである。また許は「台語聲母音素與音值一覽表」というものを載せているが、この内容は王の台南・厦門方言声母の表（図1）とほぼ同じである。ここでは、許は王の研究を忠実に受け継いでいると言える¹¹。

韻母であるが、王は陰韻16種（および入声「?」）、陽韻16種（および入声「p」「t」「k」）、鼻音化韻母10種（および入声「?」）、声化韻1種（および入声「?」）としていた。単母音は6種としていた。

¹¹ 許は「聲母的體系」の項で次のように述べている。
音聲學上的分類，亦即聲母的音值（音價）其種類之分析，學者之間意見略有出入；第一位用科學方法研究閩南語（“厦門音系”）的故羅常培教授認為有20個聲母，而戰後研究台語的權威學者故王育徳教授則認為有22個聲母（王氏早期在1957年的“台灣語常用語彙”內認為有24個聲母，其中兩個半母音 w（于）和 j（衣）後來拿掉）。兩說之差為羅氏少一個 [dz]（如）和一個 [ʃ]（詩）這兩個聲母，其餘相同。（p.69）

(2.2.1.2, 図2)

それに対して、許は「陰韻舒聲韻母」については16種（「單母音陰聲韻母」6種、「複（合）母音的陰韻」10種）、「陰韻入聲韻母」については13種（「單母音陰韻入聲韻母」6種、「複母音陰韻入聲韻母」7種）としている。「陰韻舒聲韻母」16種は王の陰韻と同じであり、また「陰韻入聲韻母」13種についても王の陰韻入声とまったく同じである。

「陽韻舒聲韻母」については14種（「~m 韻尾的韻母」4種、「~n 韻尾的韻母」5種、「~ng [ŋ] 韻尾的韻母」5種）、「陽韻入聲韻母」については13種（「~p 韻尾的韻母」3種、「~t 韻尾的韻母」5種、「~k 韻尾的韻母」5種）としている。「陽韻舒聲韻母」が王の陽韻より2種少ないが、これは王が「əŋ」「uaŋ」を韻母として認定しているのに対して、許はそれを認定していないことによる。「陽韻入聲韻母」も王の陽韻より2種少ないが、これは王が「op」「uak」を韻母として認定しているのに対して、許はそれを認定していないことによる。

「鼻音化舒聲韻母」については12種（「單母音鼻化韻母舒聲」4種、「複母音鼻化韻母舒聲」8種）、「鼻音化入聲韻母」については8種（「單母音鼻化入聲韻母」4種、「複母音入聲韻母」4種）としている。「鼻音化舒聲韻母」が王の鼻音化韻母より2種多いが、これは許が「ueⁿ」「iauⁿ」を韻母として認定していることによる。「鼻音化入聲韻母」も王の鼻音化韻母入声より1種多いが、これは王が「aiN[?]」を韻母として認定しているのに対して、許はそれを認定しておらず、逆に「au^h」「iau^h」を認定していることによる。

「聲化韻舒聲韻母」については2種、「聲化韻入聲韻母」については2種としている。「聲化韻舒聲韻母」が王の声化韻より1種多いが、これは許が「ŋ」を韻母として認定していることによる。「聲化韻入聲韻母」も王の声化韻入声より1種多いが、これは許が「ŋh」を韻母として認定していることによる。

声調であるが、許は最初に8種を示すものの、「第6聲」は「第2聲」と完全に同じであり、実際には7種であることを述べる。名称は、数字と「陰平」「陽平」等とを併記している。『雅俗通十五音』の名称として「上平」「下平」等にも言及している。いずれにしても、声調の種類や名称については王とは大差ない。ただし、調値については「第3聲」を「低降調，調値31（或作21）」とするなど、王とは若干の違いが見られる。（王は「陰去」を「11 低平調」としていた。2.2.1.3，**図4**）なお、王が紹介していた中国科学院語言研究所の声調表記方法（2.2.1.3，**図5**）については、許では一切言及はない。

転調（王の言う「声調替変」）については、まず「一般變調」として「(一) 第1聲變爲第7聲」「(二) 第2聲變爲第1聲」など7項目を挙げるが、これらは王の「一般的な法則」（2.2.1.3，**図8**）と合致する。次に「特殊變調」として「(一) 陰韻入聲韻尾（～h）第4聲變第2聲」「(二) 陰韻入聲韻尾（～h）第8聲變第3聲」を挙げるが、これらは王の「-? 入声の法則」（2.2.1.3，**図9**）に合致する。ただし、許はこの後に「(三) 形容詞重疊的變調」という項目を追加している。これは王には見られないものである。（王の声調替変の説明が、現在の台湾語学習書等の説明と合致することは、2.2.1.3で述べた通り。）

4.3 王の台湾語研究史上における位置付け

声母については、王は日本統治期の台湾語研究を、仮名とアルファベットとの違いはあるものの、ほぼそのまま受け継いでいた。そして後世の許も、王の研究を忠実に受け継いでいる。

韻母については、日本統治期の研究と比べると、仮名とアルファベットとの違い以外に、整理の仕方にも差が見られた。これは王が中国大陸の研究にも拠っていたからであろう。後世の許は、大枠では王の研究を受け継いでいるが、一部で韻母としての認定に差が見られる。声母と比べて韻母は複雑であり、また台湾語の語彙そのものも時代と

ともに変遷するため、このような差が生まれてくるものと考えられる。

声調については、7種としていることについては、日本統治期から王、許に至るまで変わりはない。ただしそれぞれの名称については、時代ごとに差が見られる。声調の種類に関する認識は言語の実態を直接反映するのに対して、個々の声調の名称は学問的な慣習に拠るからであろう。

転調については、声門閉鎖音「ʔ」に関して、日本統治期の研究と王とで記述に差が見られた。後世の許では、「形容詞重疊的變調」という新たな項目が追加されている。いずれにしても、転調に関する認識は時代ごとに深まってきていると言える。

5 おわりに

以上、『閩音系研究』の第3章「音韻体系」について、検証してきた。ここで王は、自分の母語である台南方言については、自身の内省を駆使していた。それ以外の中国大陸の方言については、大陸の先行研究に拠りつつ、時には独自の解釈も加えながら、閩音系の音韻体系について説明していた。

台湾語研究という意味では、王は日本統治期の台湾語辞書の記述を踏まえながら、中国大陸の先行研究、さらに自己の内省も取り入れることで、研究内容を発展させていた。その水準は現代の台湾語研究から見ても高いものであり、王の研究は必ず参照されなければならないものとなっている¹²。

これまで『閩音系研究』の第1章から第3章まで検証してきたわけだが、第4章以降もさらに検証していくことで、王の研究の全容があきらかにできるはずである。これらについては他日を期することにしたい。

¹² 『閩音系研究』は台湾で中国語に翻訳され、『王育徳全集』に収められている。（第7巻，何欣泰初訳，許極燉監訳，前衛出版。）

引用文献

- 王育徳（1982）『台湾語入門』東京：日中出版
- 許極燉（1998）『台湾語概論』台北：前衛出版社
- 近藤綾・温浩邦（2007）『すぐ使える！トラベル台湾語』東京：日中出版
- 中澤信幸（2020）「王育徳の閩音系分布概況および親疎関係研究再考 —『閩音系研究』第1・2章—」『天理臺灣學報』29, pp. 47-66, 天理：天理台湾学会
- 服部四郎（1951）『音声学』東京：岩波書店
- 服部四郎（1954）「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2, 服部（1960）所収, pp.240-272
- 服部四郎（1960）『言語学の方法』, 東京：岩波書店
- 樋口靖（2000）『台湾語会話 第二版』東京：東方書店
- 村上嘉英（2019）『ニューエクスプレスプラス台湾語』東京：白水社
- 羅常培・周辨明（1975）『厦門音系及其音韻聲調之構造與性質』台北：古亭書屋

付記 本稿は「天理台湾学会第30回研究大会」（2021年7月3日）での研究発表がもとになっている。発表時にはコメンテーターの羅濟立先生をはじめ、多くの方から有益なご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第です。

本稿は令和3年度～令和5年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金, 基盤研究（C）（一般）, 研究課題名：明治期における東アジア漢字音対照研究の検証と日韓台漢字音変遷の比較, 課題番号：21K00520, 研究代表者：中澤信幸）による研究成果の一部である。

A Reconsideration of the Phonology of the Min Language by Ong Iok-tik: Chapter 3 of “A Study of Min Pronunciation”

NAKAZAWA Nobuyuki

Ong Iok-tik devoted his life to researching the Taiwanese language. His most famous work is “A Study of Min Pronunciation”. I have already examined Chapters 1 and 2 of this work elsewhere, and in this paper, I will look at Chapter 3. My interest lies in Ong’s perception of the synchronic system of Min pronunciation. In researching the languages of mainland China, he depended upon previous studies and added his original opinions, because his insights were insufficient and he had difficulty conducting fieldwork. On the other hand, he made full use of his own insights in researching his native Tainan dialect of Taiwanese, since there were no previous studies of the Taiwanese language, including Tainan dialect, other than research during the Japanese colonial period. As such, Ong developed his research taking into account descriptions in colonial period dictionaries, previous research undertaken in mainland China, and his own ideas. His research is of a very high level, viewed even from a modern academic standpoint.

